

# 伊東豊雄 建築 | 新しいリアル

新宿 初台 オペラシティ アートギャラリー 12月24日まで。



観覧会では、毎週土曜日にギャラリートークという自由参加の会場めぐりツアーをやっています。展示の主旨やひとつひとつのプロジェクトの内容を説明することで、ツアーの参加者に展示内容を少しでも深く理解してもらいたい、建築とは何なのかどう楽しいのかとか、どんな未来があるかなどを考えてもらいたいと思っからすです。このようなことは、観覧会の内容をよくわかっていいることはもちろん、建築の歴史と今を縦横無尽に行き来できるだけの知識や経験をもたないと難しいことです。建築の未来を支える技術や、社会の成り立ちに対する洞察も必要です。建築の専門外の人も興味をもてるように話さなければいけませんし、専門の人にも楽しい会であればなりません。人に伝え、一緒に考えることは大変です。けれど、これらを通して

(二面に続く)



第8巻第10号  
通巻第94号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

天気が良い日には、屋根の上でぼうっと辺りを眺めたり、空を見上げたりすることがある。時代から取り残されたこの場所が目にするもの、耳にするものは、私が小さかった頃、例えば、四十年前のそれと大差はないように思える。細かいことを言えば、勿論違いはある。ありますとも。道を挟んだ都立高の無間に高い防球ネットに景色を遮られたり、嘗てはたくさんいた昆虫が姿を消していたり、カメラマン取りの何となく若い人々が遠慮会釈なく私有地を覗き回ってプライバシーを侵されたり……そんなことはあるにせよ、世間での慌ただしい変化に比べると、ここでは時間はかなりゆっくりと流れているよな、と思う。

自分でも呆れてしまう。

「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざは、多くの場合、そんな阿呆なことがありまさないな、というようなニュアンスで使われることが多いように思うけれど、そうではない、もっと現実的なメッセージを含んでいるのではないか、と思うことがある。世界は繋がっているのだよ、と。

十八だったか十九だったかの一時期、私は天沼陸橋に程近い喫茶店を頻々と利用していた。雀荘と隣接していて便利だったし、時々友だちがそこでバイトしていたし、経営者家族が暢気で気が良かったし。

その時分、パンク被れで、浪人という肩書きをもった無職の私の頭の中は、今以上に整理がついておらず、滅茶の苦茶のちゃんちきちゃんちき、宇宙が爆発したり再生したり。

つまりは、想像と妄想の境界線の辺りを右往左往しながら、ぶらぶらと過ごす日々。時々、立直一発ツモなどと前傾したり、リヴィンスラナーザークューウーウーパツなどとギターを掻きながら絶叫したり。要するに、自分自身とその周辺のごく狭い範囲のこ

(最終面に続く)

からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

### 今日の紙面から

二面(建築)

伊東豊雄 新しいリアル

三面(からすライブラリー)

U of the Luckiest Boy in the World (英語)

改正教育基本法翻訳私案

(一面から続く)

て、我々自身が次ぎに何を行うべきか、本当に大切にしなければならぬことは何か、を考へることが出来ることは大きな意味をもつのです。ギャラリートークのほかに、レクチャーや対談、取材、インタビュアーなどが行われますから、展示会の内容について、必然的に自らが反芻せねばならぬになります。これはありがたいことで、臆けて曖昧だった思考が、目を追うことに少しずつ明白になり、かたちを形成してゆくのです。

この展示会を通して何を考えたかというならば、もつとも大きなことは、ずっとやってることとは変わらないということでした。流動的な現れは消えゆくエフェメラルな空間をつくりだそうとする意思が変わりがないということです。手を変え品を変え、あらわれかたやかたちは違えど、建築としての構築性あるいは形式性をもちながらも、まだ見ぬ現代建築を手繰り寄せようとしていたのです。

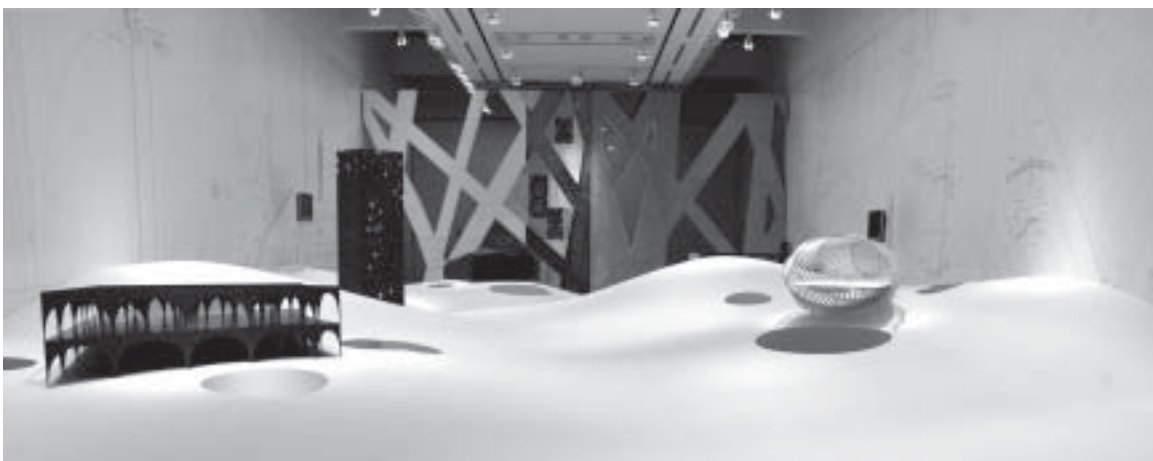
一方で、明らかに変化あるいは進化している部分があります。構造の考え方が大きく飛躍したように思います。これはパーソナルなコンピュータの進化によって構造の解析レベルが著しく進んだことが背景にあります。有限要素法を用いて、それまで不可能だった、全体を規定することなく相関的な関係に基づいた構造解析が可能になったのです。その結果、同じようにくねくね曲がった曲線や面が、表層としてではなく構造的に意味のある面として規定されることになりました。継ぎ目のない面を規定できるようにになったのです。事務所の最近のプロジェクトはこのようなものが多いようです。何も必ずしも面が連続していかなくとも、直線ですぐらされた面でも、構造の解析としては同じことが言えます。外壁を考へるときに、構造のストラクチャーを想定した後、開口の開け方を探すと、開口部が相対する関係にあると想定するのではなく、構造体ア

開口部が同じレベルのものとして混在した状況を想定することが出来るのです。かなり以前から、このような面的な発想を私たちはもっていました。構造の専門家に解析されると、全体が構築的な線材の組み合わせになってしまい、ひとかたならぬ不満がありました。線材で構造体をつくりその上に面としての仕上げをせば、表現はどんどん厚ぼつたくなりストレートな切れ味はなくなつてゆくのです。順番にものごとを積み上げ、時間の経過とともに材料も重なつてゆくわけです。

それに対して、新しい技術は、建築の構成要素に優劣をなくし、あたかも一夜のうちにできあがってしまうような建築をつくる事ができるのではないかとすら思わせるわけです。一夜のうちというのは、もしかしたら実際の施工において、将来、一夜のうちにその構造物が建つているということがありえるのかもしれませんが、いままここで言うのは、建築物の計画やかたちが、あるときに全体が一度にぱつと決まるとか、施工においては、ひとつのアクション、例えばコンクリートを打設するなど、建築物の外壁や屋根の構造も仕上げも一度にできてしまふというようなことです。局所的な構造条件や、設備などの条件を同時に検討し、一度に解くのです。もちろん往きつ戻りつしながら進めるのでしようけれど、これまでのように、ひとつの要素を決めた後に、やあ次の要素を考へるのではなく、すべてのことをできるだけ流動的にしておいて、ある一時にリリースさせるような決定の方法をとれるように思っています。

こんな思想は、他の分野では随分前から体系化されていたのでしようし、本来このような方法は、創造という訳のわからぬプロセスそのものだとも言えなくもありません。ですから、創造の能力というよくわからないものに頼るのではなく、もう少しだけオートマティクさを伴ったあるいは数値的などと言いましょ

か、アプローチができるのではないかという気がするわけです。そしてひょっとすると現実の施工に結びついて、あらゆる部分を三次元データから直接製作して、現場ではとても簡単な作業だけになるということが可能なかもしれません。今回の展示会の見果てぬ夢は、三次元のデータから直接建築物を施工できないかだったように思います。でもそんなふうに来るを見てみようという前に、古代のプリミティブな建築とも言えない建築のようなものと、その後世界で変化し発展した建築そして最後には世の中を覆い尽くした近代的な建築に対して、いま我々が何をやるうとしているのかということをしつくり考へてみる機会を提供したことが、この展示会のもつともよかつたところなのではないだろうか。ひとりひとりが考へてくれると嬉しいのだ。そしてひとりでも多くの人が、建築の面白さと大切さのようなものを感じてくれると、また楽しい世界が広がるのでしよう。



12月3日

NHK『新日曜美術館』

放送決定。

# 改正教育基本法翻訳私案

教育基本法が更新されるのはどうやら避けられない雲行きだ。特に教育で国なんぞにとにかく言われたくはない。国はサービス業なんだから、その仕事に徹すべきところ、うまくいかないのを抽象理念のせいにしてサボってるとしか思えない。

とはいえ、文言の変更は既定路線。こうなった上は、せめて私なりの抵抗を示さねばならない。(望月)

えっと、きょうは英作文やってみましょうか。タイムリーな企画ですよ。君たち、教育基本法ががいせいされるの知ってますか？ ですよ。知りませんよね。あのですね、いま「愛国心」ってのが話題になってるんですよ。きみたち、これからは愛国心を持たなきゃだめなんですよ。そこで、これです。

伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛すると、ともに他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

ちょっと終り方がおかしいけど、法律ってみんなこんななのよ。実社会とはかけ離れてるって言うかね。まあ要するに、最後に「になる」ってのが省略されてると思って、それを含めて訳してください。ヒントは、そうですね、主語は“the students”にしましょうか。生徒たち、つまり君たちのことですね。

正解例とその直訳はこんなかんじ。

If the students respect the tradition and the culture, love our country and our homeland that have cultivated them, they will respect the other countries together with the classmates, and an attitude to contribute the international peace and development will be nurtured.

もしも生徒たちが伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するならば、彼らはクラスメートたちとともに他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度が養われることになるでしょう。

これなら、「我が国と郷土を愛」さないからといって、それじゃあ駄目だって論理にはならないんで、まあよしとするんだけどな。

参考：教育基本法自民党改正案

## 第二条 (教育の目標)

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

## Article 2 ( Purpose of Education )

5 To respect the tradition and the culture, to love our country and our homeland that have cultivated them, and to respect the other countries, to nurture an attitude to contribute the international peace and development



## the Luckiest Boy in the World

Oren Bloedow

Knitting Factory Records、1998年、KFR-120



山積みになってる段ボールから何の気なしに引っ張り出した一枚。Oren Bloedowって誰だっけ、と、頭を捻るも思い出せない。ま、いいんだけど。始まった。なぜ、こんなに恰好いいアルバムが、一度聴いたきりで放ったらかしになっていたんだろ。力むのでもなく、だからと言って、手を抜くのもなく、必要なことを必要なだけ演る。ううむ。クレジットを見てみると、Medeski, Martin & Woodではないか。巧いのに巧さを見せず、つまり、良い音楽とは何かを知っている。

唄に気負いなく、曲にも気負いはなく、演奏にも気負いはない。思い出してきたぞ、Oren Bloedowって Lounge Lizardsのベースじゃないか。伴奏は達人に任せて、ベーシストがギターを抱えて唄う。なるほど。もう一度、頭から聴こうじゃないかって、もう三周目。何年遅れかのヘヴィー・ロウティションになりそうだ。

(全太)

さこちゃん

昔、工事系のバイトをしていた事がある。仕事は主に夜の首都高のトンネル。夜中、作業服を着て、道具を積み込み、黄色い2トン車や4トン車に乗り込んで、現場へ。消防や警察ではないけれど、気分はまさに出勤。夜の現場に向けて発進、ってなところ。発煙筒を落として、車を止めて規制を張る。何だか、そんなちよつとした非日常の感覚は好きだった。

社員のさこちゃんは、口ひげに短髪で普段は旧日本軍の軍服のような物を着て、ちやりんこを乗り回してるといった、ちよつとした変わり者で仕事中に色々面白い話を聞かせてくれた。

ある時、現場に向う途中、4トントラックを運転するさこちゃんと助手席の僕はいつも通り話をしていた。「オレはなー、法学部だったんじや」と。さこちゃんは昔話を始める。「の

と以外はどうでもよい、社会なんぞクソ喰らえ的な、まことに幼稚な考えを持っていたのであります。今でも、大差ないといえは大差ないのだけれども。

私より二つ三つ年上の店員のお兄ちゃんと、カウンターを挟んでどうってことのない世間話などを交わっていたある日のことである。

例によって、自分勝手な俺様理論をほざいていた私の前に、注文した珈琲を置きながら「でもさ、社会がなくなったら、水がなくて、電気がなくて、ガスがなくなると、このコーヒーは出せないじゃないか」というようなことを爽やかな慶應ボーイは言った。全く以てその通りなのであったけれど、若気の至っていた私は「コーヒー出せないんなら、喫茶店なん

(一面から続く)

小説にあげられてなー、検事になりたかったんじや」「悪い奴らを懲らしめてやるうとおもつとったんよ」僕は思わず、でえー！そんなんですか、と普段のさこちゃんからはとても以外だったので、素直に驚いてしまった。

そのまま法律の話やら、どうしてさこちゃんか検事になりたかったのかや、どんな風に夢を描いていたのかなんて、色々と話が続いた所で突然、さこちゃんは遮るようにふつと黙り込んだ。夜の首都高を走る4トントラック。ハンドルを握りながら前を見つめるさこちゃん。

「神山！オレはなー！」

「自分が一番嫌ってたタイプの大人になつちまったよー！」

いきなり大声で告白するさこちゃん。僕は大笑してしまった。

かつとつとやめたほうがいいよ」と話を摺り替える。小僧っ子の戯言、不愉快千万。然る可き気まずい空気。ま、そいつは気まずい空気もパンク、パンク。そんな調子。阿呆である。社会が、世界が繋がっているなどということとは頭ではわかっていても、知ったことではない、と。

当時も今も、世界は繋がっており、風が吹けば桶屋が儲かる。町のヤング似非パンクスZが知つていようが知つていまいが、やはり、桶屋は儲かるのである。少年Zが、社会なんかクソ喰らえと嘯いても、ノー・フューチャーとがなつても、やつぱり風が吹けば桶屋は儲かるのである。世界がそこにあり、自分がその存在であるということとは、どうしても拒めない。拒めなかつとも、やはり

あの時の、さこちゃんその叫びは決してギャグなどではなく、本当の正直な気持ちだったに違いない。それでも、そこに込められた色々な思いにも関わらず、暗い響きはなく、何処か前向きな感じさえした。

そんな出来事、助手席にいた自分を突然、今日、帰りの電車の中で思い出した。どうしてだろうか。「おれは自分の一番嫌ってたタイプの大人になつてないかなあ」と思い直してみる。未だに大人にすらなっていないのかもしい。この先、そんな風になつちまう可能性は多いにある。悩んだり、迷ったり、考えたりしてみよう。

走り続ける気持ち。

思いつきり後悔しながらでも、前に進むあの感じを見習いたい。

俺様は俺様、社会なんぞ知つたこつちやないし、好きなように生きてやるぜ、という方法論もある。あろつけれども、ねえ……などと思つてしまうのは、私が町の一介の手前勝手な少年の心を失ってしまったからだろうか。

もつとも、世界は空間的にはかりでなく、時間的にも繋がっているのであり、様々な変化があつとも狭量な似非パンクス少年は後の彼自身と繋がっているのである。当時の彼があるから、今日の彼があるのであつて、当然、明日の彼、明後日の彼にも繋がっている。

屋根の上で猫と過ごす。風が吹く。世間の皆様、儲かりまつか。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice: +81-3-3220-0644  
Facsimile: +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
篠崎健一アトリエ

編集後記  
からす新聞第八巻十号(通巻第九十四号)、無事、発刊できました。  
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。  
御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。  
次号発刊予定日は二〇〇六年十一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。